

## Agnicayana における動物供犠

伊澤 敦子

### 1. はじめに

Agnicayana の動物供犠は、人をはじめとする5頭の動物の頭部を切り落とすという物騒な内容をはらんでいる<sup>1</sup>。本稿はその実体はいかなるものか、また、その祭式解釈は黒ヤジュルヴェーダと白ヤジュルヴェーダとの間でどのような違いがあるかを検証し、その結果をもって、Agnicayana の祭式解釈の推移を跡づける一助となさんとするものである<sup>2</sup>。

### 2. 3 Samhitā と Śatapatha Brāhmaṇa との比較概観

以前 Keith<sup>3</sup> による諸 Samhitā 及び Śatapatha Brāhmaṇa の対照表を参考にして、Taittirīya Samhitā 5.1.1-7 に描かれる ukhā 作りまでを、他の文献と共に調べてまとめた。その結果、黒ヤジュルヴェーダ系3 Samhitā と ŚB の間には顕著な相違が認められ、更に3 Samhitā 相互においても異同が見られ、3 Samhitā の相互関係は複雑な様相を呈するが、それぞれ異なる派に属する諸々の Śrauta Sūtra 間において、祭式行為の規程及び使用マントラとそれが唱えられる順序に殆ど違いが見られないことから、3 Samhitā 相互及び3 Samhitā と ŚB との相違は、brāhmaṇa 的解釈の違いを反映していることが確認された<sup>4</sup>。

今回も Keith による対照表に従い、ukhā 作りに続く動物供犠をテーマとする部分を検討する<sup>5</sup>。扱う文献は以下に示す通りである。

#### 黒 Yajurveda

Taittirīya Samhitā (TS) 5.1.8, 5.5.1.1-5

Kāṭhaka Samhitā (KS) 19.8-9, 20.8

Maitrāyaṇī Samhitā (MS) 3.1.10, 3.2.7

#### 白 Yajurveda

Śatapatha Brāhmaṇa (ŚB) 3.1.3.1-2, 6.2.1.1-39, 6.2.2.1-40

先ず内容に触れる前に一見して言えることは、動物供犠を収録する部分が一カ所にまとまっていないということである。この点は ukhā 作りに関する記述と異なる<sup>6</sup>。内容的には、TS と KS の間にかなり共通する部分を見出すことが出来るが、KS が2カ所にわたって収録されており、KS の内容に合わせて TS を再構成すると、おおよそ 5.1.8 の中に 5.5.1.1-5 が割り込む形となる。また MS も2カ所に分断されており、KS と共通する内容を多少含むが、かなりの部分が独自の内容を持つ。この様に、概観した限りでは3 Samhitā は足並みが揃っていないとは言いがたい。また、ŚB においては当然ながら先の3者との相違点を見出すのは極めて容易である。この点については、後に1項を設けて論述する。

### 3. Śrauta Sūtra に見る動物供犠

この様に、一見して記述箇所にはばらつきが見られる動物供犠の全容を把握するに当たって、先の4文献のみでは到底困難を極めることが予想されるので、以下の Śrauta Sūtra を参照する。

Baudhāyana Śrauta Sūtra (BŚS) 10.9-12 (TS と同派)

Mānava Śrauta Sūtra (MŚS) 6.1.2.23-6.1.3.19 (MS と同派)

Kātyāyana Śrauta Sūtra (KŚS) 16.1.5-45 (ŚB と同派)

これらにおいても、ukhā 作りの箇所とは異なり、共通要素が多いとは言えず、また祭式手順も異なっているため、3者をまとめて式次第を抽出するのは困難であるが、共通部分を抜き出すと大略以下の通りである<sup>7</sup>。

- ①人の頭部を調達する。
- ②それを蟻塚と豆により清める。
- ③ヤマ 神への歌を歌いつつ、頭部に粘土を塗る。
- ④5頭の動物を殺して捧げる。
- ⑤溶かしバターを注ぐ。
- ⑥動物の頭部の周りをたいまつを運びつつ廻る。
- ⑦清めの儀式にて Agni と Viṣṇu 用の 11 かわらけに盛られた聖餅、Āditya 達用のバターで煮た粥、Agni vaiśvānara 用の 12 かわらけの聖餅を撒く。

うち①と④に関して、各 Śrauta Sūtra の記述が相互に異なる。まず①人の頭部の調達について、BŚS は戦場で殺されたヴァイシャと馬の頭部を使うようにと指示し (BŚS 10.9)、MŚS には稲妻か矢で死んだヴァイシャかクシャトリヤから打ち落とした頭部を運んで来るようにとあり (MŚS 6.1.2.23)、両者に共通して言えることは、人命に関して直接手を下さないということである。それに対して、KŚS には人をヴァイシャかクシャトリヤと限定した上で、囲いの中で殺し、首とナイフの間にダルバ草の葉をあてて頭部を切り落とす、といった生々しい表現が見られる (KŚS 16.1.17-18)。

次に、④5頭の動物を殺して捧げることに関しては、Śrauta Sūtra 間で異なるばかりでなく、同じ Śrauta Sūtra の中でも幾つかの選択肢が設けられており、不鮮明な印象は拭えない。MŚS では5頭 (プラジャーパティの為にヤギを、アグニ、願望の為に馬、牛、羊、ヤギ) 全てを捧げるか、後の4頭の動物は外に放してそこで殺し頭部を切り落としてから、胴体と舌を水たまり (hrada) に投げ捨てて<sup>8</sup>、プラジャーパティの為にヤギのみで祭祀を完了させるか、或いは、ヴァーユの為に5頭全てか角なしの白ヤギのみかを捧げる (MŚS 6.1.3.1,8,10,11,12)。BŚS ははじめにヴァーユへの動物供犠を行うと告げ、賭博をし牛、羊、雄ヤギを煮ると述べる (BŚS 10.9)<sup>9</sup>。KŚS の記述はこの点に関して更に揺れ動いている。以下に該当部分を抜き出して示す。

アグニ諸神、願望に動物、即ち、人、馬、牛、ヤギ、羊を捧げる (KŚS 16.1.8)。

ヤギを実際に使用するので清める (16.1.15)。

或いは、特定されていないので全て清める (16.1.16)。

4頭の胴体は水の中に投げ入れる (16.1.19)。

その場所からレンガを作るための土と水を採取する (16.1.20)。

雄ヤギを献供する (16.1.21)。

ある師達によると、5頭全てを火に献供する (16.1.23)。

(ŚB 6.2.1.13) に、残りを投げ捨てた所から土と水を採取するために、1頭のみ献供する、とある (16.1.24)。

犠牲獣の頭部を、皮と脳を取り除き溶かしバターを塗ってから置く (16.1.30)。

或いは、そのままの形で (16.1.31)。

他のものでも良い (16.1.32)。

本物の頭部が手に入らなければ、金か土で作った物でよい (16.1.33-35)。

或いは、1頭のみでも良い。即ち、プラジャーパティ用の角なしの黒ヤギ (16.1.36)。

或いは、ヴァーユに肉付きの良い白ヤギを献供し、2つの詩節のみを挿入するのもよい (16.1.41) <sup>10</sup>。

この KŚS については、ŚB を論ずる際に逐次言及する。

#### 4. 3 Saṃhitā における動物供犠

ここで、3. でまとめた①～⑦目安として TS, KS, MS を詳しく見てみると、次の様な表が出来る。

表 1)	TS	KS	MS	
①	×	×	×	
②	○	○	×	
③	○	○	×	
④	○	○	○	○ … 記述あり
⑤	○	×	×	×
⑥	○	○	○	
⑦	○	○	○	

先ず第一の特徴として、Śrauta Sūtra では内容にばらつきが見られた①と④について、3者が一致している点が上げられる。①人の頭部の入手に関しては、3者共一切言及していない。④5頭の動物を殺して捧げることに、アグニ諸神に願望に動物を捧げる。火を持って周囲を巡った後、それら動物をを放つ(TS 5.1.8.2, KS 19.8, MS 3.1.10)。プラジャーパティの為の動物(MS では1頭の動物)のみで祭式を終わらす (TS 5.1.8.2, KS 19.8, MS 3.1.10)。

ヴァーユの為の白い角なしヤギ (MS では動物、KS では角なしヤギ) は 全ての獣の代わりに捧げる (TS 5.5.1.1, KS 19.8, MS 3.1.10)。

という 3 点を、3 者共口を揃えて簡潔に述べている。

以上のことから、人の頭部を含めて、動物の入手方法 (殺し方) について沈黙を守るという態度を取った結果、極めて簡潔で一致する内容となったと考えられる。

これに関連して気づくのは、3 者共頭部を保持することの意味や重要性について全く言及していないことである。また、表 1 で明らかな様に、TS と KS は②③即ち、人の頭部を蟻塚と豆により清めることや、ヤマ神への歌を歌いつつ、頭部に粘土を塗る作業に触れるが、MS は言及しない (TS 5.1.8.1-2, KS 20.8)。①から③までは全て人の頭部に関する記述である。MS と同派の Śrauta Sūtra である MŚS は①から③に触れているので、この両者の違いは注目に値する<sup>11</sup>。

この様に、MS で特に顕著であるが、3 者の特徴として頭部についての無関心な態度が上げられる。

## 5. ŚB における動物供犠

次に ŚB に目を転じて表 1 に組み込むと、以下のようになる。

表 2) \_\_\_\_\_

	TS	KS	MS	ŚB
①	×	×	×	×
②	○	○	×	×
③	○	○	×	×
④	○	○	○	○
⑤	○	×	×	○
⑥	○	○	○	×
⑦	○	○	○	○

厳密にはやはり①から③までに触れていないが、6.2.1.18 で動物を殺し捧げる順番に言及する。即ち、先ず第一の動物である人を、次に馬、牛、羊、ヤギの順に殺し捧げる。更に次の 6.2.1.19 では、動物達を祭柱に縛る縄についてしるされている<sup>12</sup>。②③については、そもそも同派の KŚS でも述べられておらず、代わりに以下の様な記述がある。

犠牲獣の頭部を、皮と脳を取り除き溶かしバターを塗ってから置く

(KŚS 16.1.30)。

或いは、そのままの形で (16.1.31)。

他のものでも良い (16.1.32)。

KŚS は引き続き、本物の頭部が手に入らなければ、金か土で作った物でよい (KŚS 16.1.33-35)、とするが、ŚB は他の方法 (動物供犠以外の方法) で殺した動物や金や土で作った代用物の使用を禁じ、できる限り 5 頭の動物を捧げること、しかしこの頃はプラジ

ヤーパティの為のヤギと、ヴァーユの為のヤギの2頭だけしか捧げない、と述べる (ŚB 6.2.1.37-39) <sup>13</sup>。

この様に、KŚS は人の頭部の扱いについて曖昧な指示を下し、ŚB に至っては全く言及しないという特徴が見られる。また、動物の入手についても、KŚS はいくつもの選択肢を設け、しかもそれが ŚB によって悉く否定されるという両者間における不一致が生じている。更に同じ ŚB で、実際にヤギを捧げることにに関して、この動物に全ての動物の姿がある。角なし鬚は人の姿。角なし鬣は馬。8つのひずめは牛。ひずめは羊のそれに似ており、ヤギはヤギ。これを捧げれば全ての動物を捧げたことになる。(捧げるのは) 5頭全部でも、ブラジャーパティの為の(ヤギのみ)でも、ヴァーユの為の(ヤギのみ)でもよい (ŚB 6.2.2.15) <sup>14</sup>。と、6.2.1.39 と矛盾する表現が見出される。

動物の入手方や人の頭の扱いに対する、白ヤジュールヴェーダ系の歯切れの悪い態度は、殺し方についてはしかし一転する。先に見た様に、ŚB では動物を殺して捧げる順番や使用する縄について言及しており、KŚS は人をヴァイシャカクシャトリヤと限定した上で、囲いの中で殺し、首とナイフの間にダルバ草の葉をあてて頭部を切り落とすと明言する。

## 6. ŚB の特徴

最も顕著な特徴として上げられるのは、全体的にブラジャーパティの神話の形で語られている点である。この特徴は *ukhā* 作りを記述する部分においても顕著であった。ブラジャーパティ神話が採用されているのは、以下に上げる内容を述べる場合である。

- 1) 5頭の動物を捧げるに到る経緯 (ŚB 6.2.1.1-6)。
- 2) 頭部を切り離す行為とその理由 (6.2.1.7)。
- 3) 頭部を置いて、レンガで祭壇を積むことで頭と胴をつなげる (6.2.1.8-11, 13)。
- 4) *sāmidhenī, Āpri* という詩節について (6.2.1.25, 31)。
- 5) ヴァーユのための白い角なしヤギの由来 (6.2.2.6-7)。
- 6) 犠牲獣がヴァーユの為で祭餅 (*paśupurodāśa*) がブラジャーパティの為である理由 (6.2.2.12)。

この中で、2) と 3) は頭部と胴体に関する事で、更に詳しく内容を紹介する。

吉祥 (*śrī*) は頭部にあると考えて、頭部を切り離し置く(自身にまたは祭壇に)。残りの胴は水に浮かせ、雄ヤギ(を捧げること)で祭式を完結させた。動物供犠を行った後でブラジャーパティはまだアグニの終わりにたどり着いていないことを知った (6.2.1.7)。

胴体を探そうと考えて、胴体を投げ入れたその水と泥を集めてレンガを作った (6.2.1.8)。そのままでは死骸であって、悪から離脱できないと考えて、それを火で焼いて不死 (*amṛta*) にした。火で焼かれた祭式の食物は不死(甘露)なので (6.2.1.9)。

動物を捧げてから (*iṣṭvā*) それらを見たので *iṣṭakā* (6.2.1.10) 。

吉祥は動物の頭部。胴体は祭壇の5層。頭部を置いて祭壇を積むことで、胴体と頭部を

結合させたことになる (6.2.1.11)。

残りの部分を投げ捨てた所から土と水を集めて来る為に、1頭のみ捧げる (6.2.1.13)<sup>15</sup>。

この部分とその前の 6.2.1.1-6 で動物供犠の意味と目的が語られていると言っても過言ではなく、内容的に最も重要な部分である。また紙面が費やされている量から見ても、ŚB がこのテーマに重点を置いていることは明らかである。

次に量的にも多く重要視されていると見られるのは、5) と 6) でどちらもヴァーユの為のヤギに関する記述である。以下のその内容を示す。

次に一連の馬を御するヴァーユ (vāyu niyutvat) の為に捧げる。白い髭の (ヤギ)。プラジャーパティは生類を創出した時、それを見て喜びのあまり精子をこぼしてしまった。それが白い角なしの髭の雄ヤギ (aja) になった。精子は精髓。精髓だけアトマンがある。それを捧げるとアグニの終わりにたどり着く。白。精子は白いので。角なし。精子は角なしなので。ヴァーユの為に。ヴァーユはプラーナなので。niyutvat の為に。niyut はウダーナなので。この様にプラーナとウダーナを彼に置く (6.2.2.6)。

何故白で角なしか。神々が瓦解したプラジャーパティを復元した時、この犠牲獣によってプラーナを彼の中に入れた。ヴァーユの為に。ヴァーユはプラーナなので。niyutvat の為に。ウダーナなので。白で角なしなのはヴァーユがそうだから (6.2.2.7)。

犠牲獣がヴァーユの為に、paśupurodāśa がプラジャーパティの為になのは何故か。神々が瓦解したプラジャーパティを復元した時、この犠牲獣によってプラーナを彼の中に入れた。paśupurodāśa により胴体を復元した。何故 (paśupurodāśa が) プラジャーパティの為にかと、胴体はプラジャーパティなので (6.2.2.12)<sup>16</sup>。

このヴァーユの為に白ヤギは、5頭全ての代わりとして捧げられる程重要な役割を担っている。ここでは、角なしの白ヤギをヴァーユの為に捧げることで、瓦解したプラジャーパティにプラーナを吹き込んだと述べるが、同 Brāhmaṇa は ukhā 作りの箇所においてもプラーナに度々言及し、プラーナを重要視する姿勢を見せており、ここでもそれが指摘出来よう<sup>17</sup>。

総じて、ŚB は重要な点についてプラジャーパティ神話の形でその意義や由来を展開させるという特徴が見られる。

では、この点 3 Saṃhitā はどうであろうか。

先ずプラジャーパティの神話に関しては、ほとんど関心を示しておらず、わずかに TS 5.1.8.3 に āpri という詩節について、プラジャーパティが生類を創出し空となり、āpri を見てそれらで頭から自身を満たしたをいう記述が見られるのみである。

次に、先に上げた 1) から 6) までを検証してみると、1) と 6) についての ŚB 様に理由や経緯を述べている箇所は見あたらない。4) については先述した。また、それ以外の項目については、全く触れておらず、従って、頭部の重要性についての言及はなく、水の中に胴体を投げ入れるという行為も胴体と頭部の結合という概念も見出せない<sup>18</sup>。

## 7. まとめ

黒ヤジュルヴェーダ系 Śrauta Sūtra は、人の頭部の入手について具体的に呈示するが、それは戦場で殺されたヴァイシャと馬、或いは稲妻か矢で落命したヴァイシャかクシャトリヤから打ち落とした頭部を使用するという内容であった。他方、ŚB と KŚS は入手方法について黙しているが、殺し方について具体的に叙述し、実際にこの祭式の為に人をあやめた事実を示唆する。

この様な違いは何を意味するのか。殺す行為のみに関心を示す白ヤジュルヴェーダの態度は、かえって、その行為が過去のものであり、それ故安心して話題にしているという印象を与える。それに対して、黒ヤジュルヴェーダの記述はより穏当で信憑性に富んでいるだけに、この方法が、人の頭部を得る為の1つの方便として実際に通用していたことを窺わせる<sup>19</sup>。

この点を裏付けるのが、人の頭部の清め等の行為に対する各文献の扱いで、TS と KS は人の頭部を蟻塚と豆により清めることや、ヤマ神への歌を歌いつつ頭部に粘土を塗る作業に触れ、KS と MS は黄金による頭部の清めを説くのにに対して、ŚB はその点に全く言及しない。即ち、ŚB にとっては人に頭部の清めの行為は既に関心の対象ではなくなっているのである。このことは、その時点では本物の頭部を使用しなかったことの証左となる可能性を秘めている。

それに関連して、KŚS が本物の頭部を調達出来なければ、金か土で作ったものや、動物供犠を行わずに得たものを使うことを許可しており、ŚB はこれを否定するが、このKŚSの説は実際に採用されていたことが予想される<sup>20</sup>。では、何故 ŚB はこれを否定するかと言えば、祭式で本物の頭部を使用すると印象づける為であり、頭部を使用することの重要性や頭部の意味するところを説くこと、頭部と胴体の結合と言った概念をより効果的に示すのに必要だったからであろう<sup>21</sup>。また、この概念は、瓦解したプラジャーパティの体の復元という ŚB に特有と言われる思考の反映と考えられ、実際にこの思考は今回扱った部分に明示されている (ŚB 6.2.1.25, 31, 6.2.2.7)<sup>22</sup>。

今後は、他の箇所に見られる頭部に関する記述を収集し更に検討を加えていく予定である。

(略号および使用テキスト)

- BŚS Baudhāyana Śrauta Sūtra in Agni. The Vedic Ritual of the Fire Alter, Vol. 2. Ed. by Frits Staal. Berkeley 1983.
- KS Kāṭhaka, die Saṃhitā der Kāṭha-Śākhā. Herausgegeben von Leopold von Schroeder. Wiesbaden 1971.

- KŚS Kātyāyana Śrauta Sūtra. Tr. by H. G. Ranade. Pune 1978.
- MS Maitrāyaṇī Saṃhitā, die Saṃhitā der Maitrāyaṇīya-Śākhā. Herausgegeben von Leopold von Schroeder. Wiesbaden 1972.
- MŚS Mānava Śrauta Sūtra belonging to the Maitrāyaṇī Saṃhitā, Vol. 2. Tr. by J. M. Gelder. Sri Garib Dass Oriental Series, No. 31. Delhi 1985.
- ŚB The Śatapatha Brāhmaṇa in the Mādhyandina-Śākhā with extracts from the commentaries of Sāyaṇa, Harisvāmin and Dvivedaganga. Ed by Albrecht Weber. The Chowkhamba Sanskrit Series 96. Varanasi 1964.
- TS Die Taittirīya-Saṃhitā. Zweiter Theil. Herausgegeben von Albrecht Weber. Indische Studien 12. Leipzig 1872.

(注記)

- <sup>1</sup> 後にその頭部を火祭壇となる5層レンガの第1層の中央に据える。
- <sup>2</sup> 黒ヤジュルヴェーダ系の Saṃhitā では祭主が鷹 (śyena) の形の祭壇を築くことで、この鷹に乗って天上界に到達することを目的とするのに対し、白ヤジュルヴェーダ系の ŚB では祭壇を築くことで、世界創造の為に自身の体を分解したプラジャーパティの体を復元させることを目指す。プラジャーパティとアグニと祭主は対応関係にあり、プラジャーパティが復元されることで祭主は不死となる。

ŚB に描かれる Agnicayana 祭式解釈のこの最大の特徴は、主に黒ヤジュルヴェーダ系の Saṃhitā との対応箇所を持たない部分に見出される (6.1.2.12, 6.1.2.21, 6.1.2.36 etc.)。本稿では、実際に3 Saṃhitā と ŚB が対応する箇所で、このことが反映されているのかどうか、反映されているならばいかにかを検証する。

- <sup>3</sup> Cf. Keith [1967] xlvi-lxvi.
- <sup>4</sup> Cf. Izawa [2000].
- <sup>5</sup> ŚB では動物供犠の方が ukhā 作りよりも前に収録されている。
- <sup>6</sup> 以前に使用した ukhā 作りに関する記述の収録テキストと箇所は以下の通り。

Taittirīya Saṃhitā 5.1.1.1-5.1.7.4

Kāthaka Saṃhitā 18.19-19.7

Maitrāyaṇīya Saṃhitā 3.1.1-3.1.8

Śatapatha Brāhmaṇa 6.3.1.1-6.5.4.17

- <sup>7</sup> ここでは3つの主要献供 (vapāhoma, paśupurodāśahoma, havirhoma) や paryagnikaraṇa 等、通常の Paśubandha で行われる祭式行為については扱わない。Cf. 井狩 [1976].
- <sup>8</sup> 後にこの溝の中から採取した水と土を材料にしてレンガを作る。
- <sup>9</sup> Cf. Heesterman [1967] 34.
- <sup>10</sup> KŚS 16.1: agnibhyaḥ kāmāya puruṣāśvago'vyajān/8/ ajasya śundhati pracaraṇayogāt/15/



sarveṣāṃ vāviśeṣāt/16/ caturṇām apsu kāyaprāsanam/19/ tato mṛd iṣṭakārthāpaś ca/20/ ajena carati/21/ samsthithe tasya śeṣaprāsanam/22/ sarvair eke/23/ ekasyāpi kiṃ tataḥ sambhared iti śruteḥ/24/ tvaṇmastiṣkoddhṛtāni ghṛtāktāni śīrāṃsi nidadhāti/30/ sakalāni vā/31/ anyāni vā/32/ hiraṇyamayāni vā mṛṇmayāni vā anālabhyaitān/33-35/ śyāmatūparo vā prājāpatyah//

<sup>11</sup> 同派の Saṃhitā や Brāhmaṇa と Śrauta Sūtra は必ずしも内容が一致するとは限らず、両者は叙述の目的を異にするので、後者による規定が前者に含まれていなくても不思議ではないが、TS と KS の②③への対し方から推して、MS がこれを収録しないのは奇異である。Cf. 辻 [1982] 7-8.

<sup>12</sup> ŚB 6.2.1.18: puruṣaṃ prathamam ālabhate/ puruṣo hi prathamah paśūnām athāśvaṃ puruṣaṃ hy anv aśvo 'tha gām aśvaṃ hy anu gaur athāviṃ gām hy anv avir athājam aviṃ hy anv ajas tad enān yathāpūrvam yathā śreṣṭham ālabhate//

ŚB 6.2.1.19: teṣāṃ viśamā raśanāḥ syuḥ/ puruṣasya varṣiṣṭhātha hrasīyasy atha hrasīyāsi tad yathārūpaṃ paśūnām raśanāḥ karoty apāpavasyasāya sarvās tv eva samāḥ syuḥ sarvāḥ sadṛśyah sarve hy ete samāḥ sarve sadṛśā agnayo hy ucyante 'nnaṃ hy ucyante tena samās tena sadṛśāḥ//

<sup>13</sup> ŚB 6.2.1.37-39: tad dhaike/ ity evaitāni paśuśīrṣāṇi vitvopadadhaty ubheyaite paśva iti te ha te martyāḥ kuṇapāḥ sambhavanty anāpṛitāni hi tāni tad dha tathāśāḍheḥ sauśromate yasyopadadhuḥ sa ha kṣipra eva tato mamāra/37/ hiraṇmayāny u haike kurvanti/ amṛteṣṭakā iti vadantas tā ha tā anṛteṣṭakā na hi tāni paśuśīrṣāṇi/38/ mṛṇmayāny u haike kurvanti/ utsannā vā ete paśavo yad vai kiñcotsannam iyaṃ tasya sarvasya pratiṣṭhā tad yatraite paśavo gatās tata enān adhi sambharāma iti na tathā kuryād yo vā eteṣāṃ āvṛtaṃ ca brāhmaṇam ca na vidyāt tasyai ta utsannāḥ syuḥ sa etān eva pañca paśūn ālabheta yāvad asya vaśaḥ syāt tān haitān prajāpatiḥ prathama ālebhe śyāparṇaḥ sāyākāyano 'ntamo 'tha ha smaitān evāntareṇālabhante 'thaitarhīmau dvāv evālabhete prājāpatyaś ca vāyavyaś ca tayor ato brāhmaṇam udyate/39/

<sup>14</sup> ŚB 6.2.2.15: yad v evaitaṃ paśum ālabhate/ etasmin ha paśau sarveṣāṃ paśūnām rūpaṃ yat tūparo lapsudī tat puruṣasya rūpaṃ tūparo hi lapsudī puruṣo yat tūparaḥ kesaravāns tad aśvasya rūpaṃ tūparo hi kesaravān aśvo yad aṣṭāśaphas tad gorūpaṃ aṣṭāśapho hi gaur atha yad asyāver iva śaphās tad ave rūpaṃ yad ajas tad ajasya tad yad etam ālabhate tena haivāsyaita sarve paśava ālabdhā bhavanty ato yatamad asya karmopakalpetaita vā pañca paśva eṣa vā prājāpatya eṣa vā niyutvatīyah//

<sup>15</sup> ŚB 6.2.1: sa aikṣata/ yā vai śīrī abhyadhyāsiṣam imās tāḥ śīrṣasu hanta śīrṣāny evopadadhā iti sa śīrṣāny evotkrtyopādhattāthetarāni kusindhāny apsu prāplāvayad ajena yajñam samasthāpayan nen me yajño vikṛṣṭo 'sad ity ātmā vai yaño nen me 'yam ātmā vikṛṣṭo 'sad ity etena paśuneṣṭvā tat prajāpatir apaśyad yathaitasyāgner antaṃ na paryait/7/ sa aikṣata/ yam imam ātmānam apsu prāpiplavam tam anvicchānīti tam anvaicchat tad yad eṣāṃ apsu praviddhānām pratyaṭiṣṭhat tā apaḥ samabharad atha yad asyāṃ tām mṛdam tad ubhayaṃ

sambhṛtya mṛdam cāpaś ceṣṭakām akarot tasmād etad ubhayam iṣṭakā bhavati mṛccāpaś ca/8/ sa aikṣata/ yadi vā idam ittham eva sad ātmānam abhisamksariṣye martyaḥ kuṇapo 'napahatapāpmā bhaviṣyāmi hantaitad agninā pacānīti tad agnināpacat tad enad amṛtam akarod etad vai havir amṛtam bhavati yad agninā pacanti tasmād agnineṣṭakāḥ pacanty amṛtā evainās tat kurvanti/9/ tad yad iṣṭvā paśūn āpaśyat/ tasmād iṣṭakās tasmād iṣṭvaiva paśuneṣṭakā kuryād aniṣṭakā ha tā bhavanti yāḥ purā paśoḥ kurvanty atho ha tad anyad eva/10/ tad yās tāḥ śriyaḥ/ etāni tāni paśuśirṣāny atha yāni tāni kusindhāny etās tāḥ pañca citayas tad yat paśuśirṣāny upadhāya citiś cinoty etair eva tac chīrṣabhir etāni kusindhāni sandadhāti/11/ tad dhaika āhuḥ/ atravaitaiḥ sarvaiḥ paśubhir yajeta yad vā etair atra sarvaiḥ prajāpatir ayakṣyata tad evāgner antam paryaiṣyat tad yadaitair atra sarvair yajeta tad vāgner antam pariyād iti na tathā kuryād devānām tad itād iyād atho pathas tad iyād atho kiṃ tataḥ sambhared etāni vā etat kusindhāny etās citiḥ sambharati tasmāt tathā na kuryāt/13/

<sup>16</sup> ŚB 6.2.2: athaitam vāyave niyutvate/ śuklam tūparam ālabhate prajāpatih prajāḥ sṛṣṭvānuvyaikṣata tasyātyānandena retaḥ parāpatat so 'jaḥ śuklas tūparo lapsudy abhavad raso vai reto yāvān u vai rasas tāvān ātmā tad yad etam ālabhate tad evāgner antam paryeti śuklo bhavati śuklam hi retas tūparo bhavati tūparam hi reto vāyave bhavati prāṇo vai vāyur niyutvate bhavaty udāno vai niyutaḥ prāṇodānāv evāsminn etad dadhāti/6/ yad devaitam vāyave niyutvate/ śuklam tūparam ālabhate prajāpatim visrastam yatra devāḥ samaskurvant sa yo 'smāt prāṇo madhyata udakrāmat tam asminn etena paśunādadhūḥ tathaivāsminn ayam etad dadhāti vāyave bhavati prāṇā vai vāyur niyutvate bhavaty udāno vai niyutaḥ prāṇodānāv evāsminn etad dadhāti śuklo bhavati śuklo hi vāyus tūparo bhavati tūparo hi vāyuḥ/7/

<sup>17</sup> ukhā 作りの箇所においても、ŚB は重要視する部分では manas や prāṇa が頻出する。例えば、"tatvāya savitā dhiya" というマントラ解釈で、サヴィトリ神を manas に dhiya (dhi) を prāṇa に (ŚB 6.3.1.13)、また、"yuktvāya savitā devān" というマントラ解釈で、サヴィトリ神を manas に神を prāṇa に置き換えている (ŚB 6.3.1.15)。Cf. Izawa [2000] 1147.

<sup>18</sup> 但し、MŚS 6.1.3.11 に、胴体と舌を水たまりに投げ捨てる、とある。ここで、舌も投げ捨てるというのは独自の見解である。一般的な動物供犠においては、舌以外の頭部は使用されない。即ち、胴体と舌が使用されるので、この点との関連が考えられる。Cf. Schmidt [2000] 19.

<sup>19</sup> この入手方法に妥当性があるということ以外に、Mahābhārata において戦場で絶命せられたクシャトリアは天界に到るということや、武器によって斃れるということは、それによって清められたことを意味するという思考が表明されているという事実を考慮に入れる必要がある。Cf. Hara, Minoru "Apsaras and Hero". 未刊 (Journal of Indian Philosophie, Vol. 29 [2001] に掲載予定)。原 實博士の御厚意により参照させて頂いた。ここに謝意の意を表す。

<sup>20</sup> BŚS 22.2; 119.9 も金か土で作った頭部について言及する。

<sup>21</sup> ŚB 6.2.1.37 は他の方法で頭部を得ることをよしとしない。この場合の他の方法の中に、戦場で斃れたクシャトリヤの頭部を採取する事が含まれているか定かではないが、犠牲となる動物は動物供犠によってなだめられる (āprīta) 必要があることが強調されている。

<sup>22</sup> ŚB 6.2.1.25: .... prajāpatiṃ visrastam yatrāgniḥ samadadhāt tam abravīd yā mat sammitāḥ sāmīdhenyas tābhir mā samintsveyi//

アグニが瓦解したプラジャーパティを復元すると、プラジャーパティは言った。

「sāmīdhenī は私と等しい。それで私に火を付けよ」と。

ŚB 6.2.1.31: .... prajāpatiṃ visrastam yatrāgniḥ samadadhāt tam abravīd yā mat sammitāḥ āpriyas tābhir mā prīṇihīti//

アグニが瓦解したプラジャーパティを復元すると、プラジャーパティは言った。「āpri は私と等しい。それで私をなだめよ」と。

(参考文献)

- Dumont, P-E. [1951] "The Special Kinds of Agnicayana (or Special Methods of building the Fire-Altar) according to the Kaṭhas in the Taittirīya-Brāhmaṇa, TB 3.10-12 with Tr.." *PAPS* 95-6, pp. 628-675.
- Dumont, P-E. [1962] "The Animal Sacrifice in the Taittirīya-Brāhmaṇa, The Part of the Hotar and the Part of the Maitrāvaruṇa in the Animal Sactifice, TB 3.6 with Tr.." *PAPS* 106-3, pp. 246-263.
- Dumont, P-E. [1963] "The Human Sacrifice in the Taittirīya-Brāhmaṇa, TB 3.4 with Tr.." *PAPS* 107-2, pp. 177-182.
- Dumont, P-E. [1969] "The Kāmya Animal Sacrifices in the Taittirīya-Brāhmaṇa, TB 3.8 with Tr.." *PAPS* 113-1, pp. 34-66.
- Eggeling, J. [1989] *The Śatapatha-Brāhmaṇa*, Part III. (The Sacred Books of the East 41.) Delhi.
- Heesterman, J. C. [1967] "The Case of the Severed Head." *WZKSO* XI, pp. 22-43.
- Ikari, Y. [1989] "The Development of Mantras in the Agnicayana Ritual (1) –On the treatment of *hautra* mantras-." *ZINBUN* 24, pp. 1-11.
- Izawa, A. [2000] "On the Ritual Interpretation of the Beginning of the Agnicayana." *Journal of Indian and Buddhist Studies*. 48-2, pp. 1149-1146.
- Keith, A. B. [1967] *The Veda of the Black Yajus School entitled Taittirīya Saṃhita*. (Harvard Oriental Series 18.) Delhi.
- Schmidt, H-P [2000] "How to Kill a Sacrificial Victim." In *Makaranda (Madhukar Anant*

*Mehendale Festschrift*), pp.17-28. Ahmedabad.

- Tsuji, N. [1981] "The Agnicayana-Section of the Maitrāyaṇī-Saṃhitā with Special Reference to the Mānava-Śrautasūtra." *Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko* 39, pp.125-148. Tokyo.
- Weber, A. [1983] "Ueber Menschenopfer bei den Indern der vedischen Zeit." In *Indische Streifen*, pp.54-89. Osnabrück.
- 井狩弥介 [1975] 「アグニチャヤナ祭式と古ウパニシャッド」『宗教研究』49-2, pp.51-73.
- 井狩弥介 [1976] 「Vāyavya-paśu (Baudh ZS X. 9-11) 覚え書」『印度学仏教学研究』24-2, pp.951-943.
- 辻直四郎 [1982] 「ブラーフマナとシュラウタ・スートラとの関係」『辻直四郎著作集 第二巻』

2001.1.10 稿

いざわ あつこ 東京大学大学院博士課程

It is reported that in the animal sacrifice of the Agnicayana, five animals including a man are beheaded. In this paper we deal with the brāhmanic interpretation of the animal sacrifice, using the following eight texts:

Black Yajurveda: *Taittirīya Saṃhitā* 5.1.8, 5.5.1.1-5; *Kāṭhaka Saṃhitā* (KS) 19.8-9, 20.8; *Maitrāyaṇī Saṃhitā* (MS) 3.1.10, 3.2.7; *Baudhāyana Śrauta Sūtra* (BŚS) 10.9-12; *Mānava Śrauta Sūtra* (MŚS) 6.1.2.23-6.1.3.19.

White Yajurveda: *Śatapatha Brāhmaṇa* (ŚB) 3.1.3.1-2, 6.2.1.1-39, 6.2.2.1-40; *Kātyāyana Śrauta Sūtra* (KŚS) 16.1.5-45.

First, we give an outline of this sacrifice by studying the three Śrauta Sūtras, and find that they differ from each other in two important matters, namely, (1) how to obtain a human head and (2) which and how many animals are actually sacrificed.

Second, the Saṃhitās are examined, referring to the above-mentioned outline. The three Saṃhitās share similarities in the treatment of the two matters. They do not mention (1) and give almost the same instructions for (2).

Third, the ŚB is examined in the same way. As regards (2), the ŚB rejects the alternatives which the KŚS suggests. The ŚB does not mention (1) and the purification of the human head, but talks about an order for killing the victims and about the rope with which the victims are tied to the sacrificial post. The KŚS also mentions the rope and explains how to kill a human victim.

Fourth, we show the characteristics of the ŚB. It tends to explain the animal sacrifice in the form of the Prajāpati myth, and tells the reason why the heads are kept and the bodies are thrown away into the waters and shows the concept of uniting the trunks (the five layers of the fire altar) with the heads. In the ŚB a sacrificer piles up the fire altar to restore Prajāpati, who created the world through his own dismemberment. The head and trunk concept is surely not irrelevant to this purpose.

The fact that the White Yajurveda is interested only in the action of killing suggests that the action was not carried out any more at that time, so that it was a safe topic. On the contrary, the way of obtaining the human head indicated by the Black Yajurveda seems proper and reliable, and so it is safe to say that this method was really accepted. Evidence of this can be derived from the fact that the ŚB does not mention the purification of a human head at all. This means the ŚB has no interest in the matter. Given that at the time of the ŚB real heads were not used, we might ask why the ŚB rejects the use of counterfeit heads of gold or clay. It could be that the ŚB focuses attention on the importance and meaning of using a head, and it may have been effective for this to give the impression that real heads were used.